

令和5年度第1回茨城県図書館協議会 議事録

1 開催日時等

- (1) 日 時 令和5年9月5日(火) 13:30～15:30
- (2) 会 場 茨城県立図書館 会議室1・2
- (3) 出席者 協議会委員：池内委員長、成田委員、川又委員、
永山委員、木滝委員、川野邊委員
生涯学習課：田山課長補佐
県立図書館：小田部館長、木村副参事兼副館長兼企画管理課長、
茂木主査兼情報資料課長、武田主査兼館内サービス課長、
鈴木主査兼普及課長、情報資料課重藤主査、
企画管理課栗原主査

2 協議会内容

- (1) あいさつ等
 - ・小田部館長あいさつ
 - ・定足数報告、日程説明(進行)
- (2) 委員・職員の紹介(木村副館長から紹介)
- (3) 委員長・副委員長の選出
 - ・委員長に池内淳委員、副委員長に鷲田美加委員が選出された。
- (4) 池内委員長あいさつ
- (5) 県立図書館等の概要説明(木村副館長から以下について説明)
 - ・図書館概要について
 - ・県図書館協議会について
 - ・令和4年度図書館評価について

(6) 議事

(A委員)

はじめに、令和5年度からの協議のすすめ方とスケジュールについて事務局から説明願います。

(事務局)

協議の進め方についてであるが、これまでは図書館からの諮問を受け、協議会でそのテーマについて2年間協議し「建議書」としてまとめて、ホームページに公表していた。たとえば、令和3・4年度は「県立図書館における情報発信のあり方について」というテーマで協議していただいた。

今回から、これまでのように建議書としてまとめるのではなく、毎回協議するテーマを決めて協議し、図書館への意見としてまとめて、ホームページに掲載する形としたい。ホームページには、発言した内容を議事録としてまとめて公表していきたい。

なぜこういう形にするかの理由であるが、この形にするということは、図書館側からの提案である。それは、図書館を取り巻く環境の変化が早く、めまぐるしく変化している。これまでは2年間で同じテーマとしてきたが、2年では、間に合わない、遅いということもあり得るし、建議書としてまとめるより、意見としていただきたいタイミングで臨機応変に意見、アドバイスとしていただくことができれば有り難いと考える。また、もう一つ、図書館にはその時々様々な課題があり、その課題に対するいろいろな意見をいただきたいという思いがあるためである。

スケジュール的には、今年度は第1回目を9月、2回目を12月、3回目を2月に、そして、6年度は、第1回目を6月、2回目を9月、3回目を2月と考えている。これまで同様1年で3回、2年で合せて6回と考えている。

(A委員)

ただ今、事務局から協議のすすめ方とスケジュールについて説明していただいた。

これまでのように2年間議論して2年に1回協議会から図書館長あて建議書を出していたスタイルではなく、基本的には協議会で1回1回議論して、その都度何らかの形でまとめて、もどしていくというスタイルにしていこうということだが、皆様よろしいか。

ご意見はありますか。

(事務局)

1回で意見がまとまらない場合には、次回も同じテーマで協議することも可能と考える。

(A委員)

これまで、過去の協議会では、「県立図書館のありかた」とか、大きなテーマ、方向を定義するような議論は、一通り議論がなされた。大きな図書館の方向性は一貫としている、情報環境への変化ということから、端的に完結していかなければならない課題が山積している。

協議会でも、タームの区切りを短くして、議論をしていくという方向で、また、大きな議題がでてくれば、それに応じた検討期間を設けていけばよいとよい、というフレキシブルなやり方で、すすめ方とスケジュールについては、承認していただいたということによろしいか。

次に、何を議論するかということについて、事務局から説明願います。

(事務局)

今回は、初めての議論なので、事務局で考えさせていただいた。

今回、協議題として提案させていただいたのは、先程図書館概要で説明させていただいた「知の探究セミナー」の令和6年度のテーマについてである。これまでも図書館では、各種講演会や講座等の事業を行ってきたが、文化、芸術、学問の発信基地としての役割をさらに充実させることを目標に今年度から「知の探究セミナー」としてすすめている。ペースとしては、月2回程度以上をやることになっていて、年24回以上となる。

令和5年度は、まずやりましょうという考えで、テーマを決めずにやってきた。内容的には多彩だが、内容が整えられていない。

来年度のテーマは、基本的には3つの柱を考えている。

柱1 当該年度の時事ネタで図書館がセレクトするもの

柱2 県の施策に関連するもの（担当課所と連携して実施）

柱3 文化関係：美術館・博物館との連携、音楽関係（毎年テーマは変更）

（A委員）

協議題としての「知の探究セミナー」は、今回の議題か、次回か。

（事務局）

今回の議題としてお願いしたい。

（A委員）

「知の探究セミナー」について、確認させていただきたい。

- ・今年度から月2回か。
- ・予算は、あるのか、ないのか。
- ・やることになったきっかけは？

（事務局）

・星乃珈琲店を図書館の中に設置するとなった時から「図書館魅力向上事業予算」として予算を確保して魅力向上事業を実施している。この事業を拡充して、知の探究セミナーとして今年度から実施していくことになった。

- ・今年度は、とりあえず、これまで単発で行ってきた事業等から実施した。

（A委員）

場所や会場はどうなっているのか。参加人数はどうか。

（事務局）

会場は視聴覚ホール等である。

人数は・英語多読 60人
・JAXA 100人（配信での視聴者含む）
・ブックディレクター 80人 程度である。

（A委員）

いつまでやるか決まっているか。

（事務局）

今年を含めて3年くらいはやりたいと考えている。

お客様が集まって、ある程度図書館に賑わいが戻って、3年目でどれくらい結果がでてくるかで、判断していく。

(A委員)

今年度の企画は、どのように考えていったのか

(事務局)

これまで単発で実施していた事業のなかで好評だったもの、例えば、世界の文化に触れるということで「世界のボードゲーム」を実施したが、昨年好評で、今年度は、回数を5回やることになった。参加者が多ければ、来年度も継続して行っていこうと考えている。

また、県が中心的に取り組んでいる事業、宇宙開発等に関連して「JAXA 講演会」、県北振興局で行っている県北ロングトレイル講演会等、県の取り組みも参考にしながら企画している。

(A委員)

ボードゲーム等のゲームに関しては、図書館イベントとして開催するだけでなく、図書館資料として収集している図書館が全国的に増えている。

図書館の魅力を創造する事業ということなので、イベントに参加してもらい、いろいろなことに関心を持ってもらう、さらに、インターネットと図書館資料、図書館ツール、知識を深めていく、発展的に広げていく等、なかなかよいのではないか。

知の探究セミナーということについて、来年度のテーマは特に決まっていないのか。

様々なサービスを、より一層県民の皆様魅力を発信して、この協議会でも理解をすすめていきたい。

委員の皆様、ただ今の説明に、ご意見ご質問はあるか。

知の探究セミナーについて、来年度のテーマについて、意見を伺ってよいか。

このセミナー等は、結構な集客がすでにあるとのことだが、茨城県でしかできないということにこだわる必要は無いと思う。茨城県の何か魅力があるということがあると、さらには良いが。何かテーマについて、意見はあるか。

珈琲ドリッ講座は、星乃珈琲店で実施したのか。

(事務局)

珈琲マイスターの方に講師をお願いしている。25名の定員だが、大変人気で30名~40名の応募がある。コーヒーとケーキで1,500円である。今年度は4回実施を予定している。

他のイベントは無料で実施している。

(A委員)

夏の公共施設は冷房が絶妙である。1階は涼しい。冷房のレベルが低いのではないか。

今年の夏はとても暑く、皆が図書館に集まる。クールシェアにはびっくりした。電車よりも涼しい。

(事務局)

冷房の温度管理は、利用者からの要望を聞いて、上げたり下げたり対応している。

(B委員)

今年、こども基本法が施行されて、今年秋には、こども大綱の発表が予定されている。県でもいろいろなところで、関連プランが改定になってくるはずである。

こども基本法、こども権利条例、包括的法律等。それらを学ぶ機会は大切である。「子どもの声を聞きましょう」と言われる一方、子どもの声を聞くと子どもを我がままにすると聞かれる。子どもが言っていることを全部聞かなければいけないということではなく、ただ、行政として理解を進めていかないといけない。子どもの声とはどういうものか、学ぶ機会はなかなかない。来年度のテーマに入れてもらえたらと思う。

いろいろな勉強会、研修会、講演会と関りがある。茨城ではほとんど機会がない。自分でアンテナを高くして学んでいかないといけない。

セイブザチルドレン、浦和大学の林大介先生は、楽しい話をしてくれる。子どもの権利条約ネットワーク事務局長である。広くとっかかりのあるところから話をきけるとよい。難しい話ではなく、子どもの声を大人がひろうには、どうしたらよいかというところから聞ける。

子どもの権利ということについて、茨城では遅れている。基本法ができたことで、行政が関わっていかなくてはならない。

(A委員)

つみたてNISA等、ネットで調べればいいのだろうが、人に話を聞くのが分かりやすい。

図書館の来館者は、中高年層が多い。中・高・大学生は、勉強の場があり、新しい知識のを学ぶ機会がある。成人への教育の機会は、自分から情報を取りに行かないとない。

確認であるが、知の探究セミナー以外にも県立図書館でやっているイベントはあると思う。知の探究セミナーなのか、それ以外のイベントなのか、その切り分け、違いは何なのか。

(事務局)

今年、「知の探究セミナー」を急に立ち上げた。多彩という言い方もできるが、開催しているイベントの中から、文化・芸術等に特化したものを中心に選んで数をそろえたという感じである。切り分けは明確ではない。

来年度は、関連するものの塊を作って月2つ以上のイベントとして事業を実施したい。

(C委員)

先ほどの池内委員長の意見に賛成である。「これからの投資講座」等、ぜひやった方がよい。最近の本はあまり売れない。本が分かりずらくて買えない。

最近の金利は、1000万円、0.002%であるとか。それを考えると、ニーサは200万円まで枠が増えたとか。そういう勉強は良いと思う。

県北ロングトレイルの話があったが、御岩神社に行った。ここから先は5億年前の地層、1億年前の地層等が示してあった。このような勉強も面白い。

小さな会社の作り方等はどうか。今、水戸から北は、新しい会社が起こっていない。若手はいろいろ仕掛けている。栃木県等では、面白い、小じゃれたものがある。

こういったことを図書館で聞けるといいのが良い。非常に大きい。

(A委員)

具体的な新しく起業を起こしたという人の話を聞くというのも「知の探究セミナー」になると思う。

中・高校生は、勉強する場所として、非常によく図書館を訪れている。授業のうまい人に授業をしてもらう、というのがあっても面白い。

来館者に行う講演会、オンラインでやる講演会（あまり利用していない人、遠くで利用できない人）は、大きな顧客になると思う。アピールの1つとして良いと思う。

(D委員)

どういった年齢層の人を対象に考えるのか、図書館には中高生が自習に訪れる。その他、仕事、子育て中の人、中高年の人が利用するイメージがある。

学校現場にいると、子育て中の30代、40代の人を利用するのは少ないのではないかという印象である。いろいろなことを学んでもらえると良いと思う。

子どもの人権について、親子で学ぶ機会を設定すると、自分一人で学ぶより、子どもと一緒にだと参加率が上がる。

中高生のキャリア教育につながる何か、テーマを設けて〇回シリーズとかで実施すると、興味を持って参加できるのではないか。

また、遠方の方はイベントに参加しづらいが、オンライン配信での勉強であれば、みんなの図書館になるのではないか。

(B委員)

親子で学べるシリーズを作ってもらえると嬉しいと思う。子どもも分かっていないとダメであると思う。

最近、防災が見落とされがちである。9月1日は関東大震災から100年である。

茨城は、被災率が高いのに、防災意識は低い。3.11は茨城も関係している。

3.11震災当時の小中学生の被災体験を、若い語り部が語る機会が増えている。

ここ10年、子どもを亡くしたという人が語る語り部が多かったが、当時小さかった子ども達が、避難所で過ごすなど、語る場所がなかった。そして、大人にこういうことを言っはいけないと、声を殺していた。その当時の子ども達の心の声を聞く機会ができてきた。

最近では、災害に備える、備災（びさい）ということが主流になってきている。

(A委員)

関東大震災から100年であり、展示やイベントがいろいろ行われている。

記録が残っているということがすごい。この100年、忘れないで繋いできた。3.11は、いろいろなところで収集プロジェクトが立ち上がっている。記憶・記録を継承していく、それは図書館とも馴染むテーマであると思う。

化粧品について、最近男性でも化粧品をする。化粧品会社の方に来てもらうというのも面白いのでは。

他に、何か、テーマはあるか。

(B委員)

若い人の間で、パワースポットが話題になっている。茨城でもパワースポットがある。香取神社、息栖神社、鹿島神宮は3カ所巡らないといけないが、結構知られていない。御岩神社もパワースポットのひとつ。地理の勉強にもなる。茨城のキャンプ場も若い人たちに人気である。

(A委員)

地理や歴史の関係は、固定客層がある。風土記等もなかなか面白い。

(C委員)

講座の会場は、図書館でないとダメか？

親子ずれ等には、内原のショッピングセンター等での出前講座はどうか。

県庁でやっても、お客はあまり来ない。県立図書館で知的な講座ならお客さんは来る。

(A委員)

出張もないわけではないが、できれば図書館に来て欲しいというのがある。

(B委員)

図書館で、他の施設との連携もやっている。歴史館、陶芸美術館、近代美術館等とタイアップができています。

夏休みに水族館とのタイアップはどうか。

(C委員)

県庁25階はどうか。障害物はなく、全体が見えるのが良い。

(A委員)

イオンモールは日本各地にある。地域の社会基盤になりたいという意識で、内部に図書館を誘致しているところもいくつかある。イオンモールのような場所に、図書館の出張所を設け、そこで何かのサービスをするというのも良いのではないかと。人が集まる場所に県立図書館をつくるというのも悪い話ではない。

(C委員)

CDの枚数であるが、230枚というのはおそらく少ないと思う。

ブックオフでDVDは貸出レンタルがある。

CDは、1万枚はリリースしている。

あなたなら、こんなCD聞きますか？のような、流行のKポップなど、勉強会をしてみてもどうか。

(事務局)

CDの選定、購入は、幅広い分野から行っている。一般的ポップスの他、落語、ジャズ、クラ

ッシック等をセレクトしている。

(A委員)

レコードは、CDにかわって、生産されなくなったが、図書館でレコードのコレクションがあり、大きな価値を持ち始めた。

今、CDの売れ行きは下がってきている。CDレンタル店舗も減っている。

持っていれば意味がある。

傷がつきやすく、トラブルが多いのも事実である。多くの方は配信サービスを利用している。

図書館によっては、ナクサスミュージックライブラリーでクラシックのを配信するところも増えている。

けして、全部捨ててしまわずに、持っておくということも重要なのかなと思う。

(B委員)

キャリア教育はどうか。

茨城にはJICAもあるが、子ども達が内向きであり、もっと世界を見て欲しいと感じている。

南スーダンで活動し、退避した川原先生、「風に立つライオン」のモデルになった人であるが、そのような人に話を聞くのはどうか。

高校生で世界を知った方が良く、世界に目を向けるような活動をしてほしいと考える。

(A委員)

補助金や経済的援助、海外に行くために充実していたが、コロナの3年間で、それが止まってしまった。外国に行くにはお金がかかる。日本に戻ってポジティブに後押しができるようになるとうい。

知の探究セミナーは、月2回、3年はやろうとしている。また、いずれ、このようなテーマはどうだろうという話を引き続き、気軽に検討していってもらえればよいと思う。

(B委員)

水戸市の図書館では、大人のコーナーと子どものコーナーが地続きになっていて、子どもが絵本を見ている、お母さんが子どもの声を気にしている。県立図書館のこどもとしょしつは他のコーナーと区切られていて来やすい。

1・2歳の子どもは、声の音量を調節することができない。普段の声しか出せない。声の大きさは、大きくなると調節できるようにならない。そのことを気にしているお母さん方が多い。

県立図書館で、おはなし室を使っていない時に、「入っていいのかな？」と気にしているお母さんを目にする。靴を脱いで入っていいのか、ダメなのか、特に表示がない。入っても良い時には、例えば「入っていいですよ。くつをぬいでね」等の表示を部屋の外にしてもらえると分かりやすく助かる。

1・2歳児はイヤイヤ期である。お母さんのメンタルは弱く、「ダメです」と言われるのが怖くて聞けない。優しく明記してほしい。

また、他方、夏にすごく暑くて、命を守るために図書館に来ている大人の人がある。壁際に

大人の人が来たときに、座って読む場所があまりない。今年の夏休みに気づいたことは、暑くて家では涼めない人が結構多いということである。星乃珈琲店を除くと、椅子のあるところが限られてしまっている。丸い椅子でもパイプ椅子でも壁際等があると助かる。

(事務局)

こどもとしょしつが区切られているのは、デメリットでもあり、メリットでもある。導線状でベビーカーがそのまま行ける。他のコーナーから離れていて声を出してもいい。

おはなし室は、特に書いてはいないが、イベント等がなくあいていれば部屋は使える。表示については、内部で検討する。椅子については、検討させていただきたい。

(B委員)

水戸市東部東部図書館は、託児を申し込むには、朝行って、並ばないと申込みできない。オンラインでの予約ができるのはありがたいと、お母さんたちが言っていた。

(事務局)

当館でも、オンラインで事前に数の把握ができるのはありがたい。

(B委員)

水戸では、並んで、ダメだった時のショックが大きいようである。普段、子どもの面倒を見ていて、自分で読みたい本を探すこともできないお母さん達が、少しの間でも本を見ることができるとありがたいことである。

(A委員)

図書館で話をするということについて、図書館は静かにするべきだというモラルで縛られているので、変わらない。職員ですらひそひそ話で話をしている。

例えば、駅のエスカレーターでは、人は左に寄ってならび、頑なに右を開けている。モラルである。

「新しい図書館はこうする」と決めると、途中から変えるのは難しい。

図書館を、対象ごとにゾーンでわけるのはどうか。

40代・50代のゾーン（一緒にいても気にならない）。10代は全然違う。ローティーンとハイティーンでは全然違う。アメリカでは、小・中・高校とゾーン分けしている。うまくゾーン分けができるとトラブルが少ない。

(B委員)

親子の会話で、子どもがうるさいのは当たり前である。子どもの声はうるさい。理性でよしとしているだけである。

(A委員)

今回の協議会は、この辺で終了としたい。

次回からの図書館協議会について、1回、1回テーマを設定して協議していくというスタイルで検討することになると思う。もし、12月までにテーマを考えついたら、事務局に連絡いただ

きたい。議事はここで終了とする。

(7) その他

- ・事務局から事務連絡について説明

(8) 閉会